

清水 乞教授を送る

清水 乞先生は昨年八月に古希を迎えられ、本年三月末日をもって定年退職されることになった。私が本学科に奉職叶ったのは平成五年度であるから、先生とのお付き合いは丸九年ということになる。

この九年間というのは、適切ではないかも知れない。なぜならば、私は、農村地帯の真言宗の一寒寺に生れ育ち、学問の世界の端のほうに喰らいついた学生時代に、現代日本語で書かれた真言宗関連の図書を読み始めたのであるが、そのなかに清水先生の御論考と澁刺とした清涼さを窺わせるお写真に接していたからである。これが御業績表にも示されている『アジア仏教史・インド編Ⅳ 密教』であった。この本のお写真の先生と、九年前の桜の宵に迎えて戴いた折りと今のお姿に、あまり違いを感じないのは私ばかりではないのではなからうか。

先生はいつも飄々としておられ、談義を楽しまれ、スポーツ観戦を趣味になさっておられる。紫煙を好み、飲酒をなさらなくとも酒宴を決して厭われなかった。形式主義に陥ることを嫌われ、思惟の自由を重んじておられる。このような先生のお人柄が、先生の学問に發揮されているように思われる。

先生は、本学科の前進である仏教学科に編入学された後、大学院で仏教美術を専門に研究されたようである。現在も先生の修士論文が学科資料室の書庫にあつて、一度拝見したことがある。真に几帳面な手書きの御論文に、未踏の分野を開拓しようとする鋭気が感じられた。浅学で其学の状況はよく知らないが、前掲書所収の御論考は、漢訳・サンスクリット語・チベット語資料を中心とする密教研究が隆盛に向おうとする時代的狀況のなかで、ヒンドゥー教の百科全書とも言うべき膨大なプラーナ聖典に記述されているヒンドゥー教の秘教的なタントラにまで視野を広

げておられ、この御論考のもつ先見性を強く感じたことを今でもはっきりと覚えてゐる。ヒンドゥー教の欧文による近年の概説書は、プラーナ文献群には正統的なヴェーダ的伝統とタントラの伝統の多くの要素が混在していると明記しているが、一九七〇年代初頭における邦文による関連研究は、先生の御論考以外に類例を見かけない。わが国のインド学においてプラーナ研究が市民権を得るようになり、また、広義の密教研究の領域のなかにヒンドゥー教タントラの研究が包含されるようになったのは、最近のことである。

先生の御研究は、密教の図像学を原点にし、マンダラとその観想法の造形的概念の研究に展開し、ヒンドゥー教の造像論、建築論そして演劇論に伸展している。修行者あるいは帰依者が佛あるいは神を観想する心作用と、それによって現出される宗教的空間、その結実としての仏像・神像や図像・寺院などの被造物あるいは身体表現の意味、すなわち、その造形的觀念が先生の主たる関心事であるといえよう。用いられるサンスクリット語資料は、わが国においては未知の文献が多く、論書であるから極めて難解と推測される。その資料を解読し、次々と紹介して来られた先生の瘦身のお姿は、百八礼拝に一瞥入れて彫刻する往昔の仏師の姿に重なり合う。

先生は、長い間学科主任を勤められ、教養課程の組織改廢の困難な移行期には重責の教学部長も勤められた。また、我々後学の良きご意見番として、気さくにお付き合い戴いた。其学の開拓者として、また感性を大事になさるよき忠告者としての先生を、甚だ残念ながら定年規定によってお送りしなければならぬ。ささやかながら本論叢を捧げて、先生の御学恩と学科への御貢献に報いたい。

最後に、先生の益々の御健勝と御精進を祈念致し、お送りする詞にかえたい。

平成十五年正月四日